

児童期の生活体験と木材利用意識に関する一考察

熊本大学 田口浩継

A Study on the Effects of Life Experience in Childhood and Awareness of wood Utilization

Hirotsugu TAGUCHI

(Received October 14, 2010)

1. はじめに

近年，地球温暖化等の環境問題を理解した上で，それらを解決し，持続可能な社会を実現するために，学校教育および社会教育において「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）」と結び付けた環境教育が世界的に推進されるようになった¹⁾。

平成20年に公示された新学習指導要領・中学校技術・家庭科においても，その改善の基本方針に，持続可能な社会の構築を目指し，技術と社会・環境との関わりの改善・充実に努めることが挙げられている²⁾。さらに，技術分野においては，木材や森林に関連する学習内容として，「持続可能な社会の構築の観点から計画的な森林資源の育成と利用等の技術の必要性に気づかせる」「木材など再生産可能な材料を利用することが社会や環境に与える影響について検討させる」ことが述べられている。特に木材の利用推進に関しては，木材は「再生産可能な材料」であり，「生産や加工に要するエネルギーが少ない材料」であることや，人工林については「植林・栽培・活用」のサイクルを保つことが重要で，木材の利用を促進することも環境保全につながることを理解させることが重要である。さらに，国産木材を利用することは，ウッドマイレージの点で環境に与える負荷を軽減するとともに，林業の活性化につながり，ひいては健全な森を育て森林のもつ多面的機能が発揮されることとなる。

今後，森林・環境教育を行っていく上で森林や木材に対する知識を得ることももちろん重要なことである。しかし，このような知識の真の定着は児童期の生活体験と密接に関係するという指摘がある³⁾。したがって，森林・環境教育の展開を議論する上で児童期の生活体験の実態と森林・木材に対する認識の関係を明らかにすることは重要といえる。

本報では，児童期の生活体験について，性別や年齢層，生活圏による比較を行うとともに，これらの経験と木材利用に対する意識の違いについて分析を行う。

2. 調査および調査方法

2.1 調査対象・方法

児童期の生活体験および木材利用に対する意識を調査するために，熊本県内で開催されたものづくり教室に参加した児童・生徒および保護者を対象にアンケート調査を実施した。地域毎に分類すると，県北（山鹿市・和水町）42人，熊本市110人，県南（八代市・水俣市）80人の合計232人である。年齢毎の内訳は，6～15歳：94人，16～25歳：25人，26

～35歳：36人，36～45歳：68人，46歳以上：9人であった。性別でみると，男性：78人，女性：154人であった。

平成21年6月から7月にかけて調査対象者に，年齢，性別，児童期の生活環境および生活体験，現在の日常生活における時間の使い方，森林と生活との関係，木材利用に関する意識等についてアンケートによる調査を行った。なお，「児童期の生活体験」の項目は，中学生以上の対象者については，小学校までの生活体験を調査の対象とした。

2.2 調査内容

表1に示すアンケートは，生活体験を調査するため片岡³⁾，深谷ら⁴⁾の調査を参考として，人間関係，自然体験，野外活動，技術体験からみた生活体験の度合いを調査したものである。なお，評点については，「よくある」「ときどきある」「何度かある」「一度もない」を各々4，3，2，1点として，項目毎に加算してそれぞれの集団の平均値を算出した。また，調査結果は，年齢，性別，生活環境（小学生までの居住地域）の3観点により分類し集計を行った。

表1 生活体験に関する質問事項の分類

項目	質問事項
人間関係	1. 一人で一晚以上，留守番をしたことがありますか 2. 家族の誰かを看病したことがありますか 3. 近所の子どもと遊んだことがありますか 4. 赤ちゃんをおんぶしたことがありますか 5. 家族の服を洗濯したことがありますか 6. 家族のために食事をつくったことがありますか
自然体験	7. クモの巣づくりをみたことがありますか 8. カエルに触ったことがありますか 9. 犬や小鳥の死に出会ったことがありますか 10. 牛や馬を近くでみたことがありますか 11. 野生の動物（タヌキやリス等）をみたことがありますか
野外活動	12. わき水や井戸の水を飲んだことがありますか 13. 川や海で魚つりをしたことがありますか 14. 山登りやハイキングをしたことがありますか 15. カキ，クリを自分でとって食べたことがありますか 16. 木の苗を植えたことがありますか
技術体験	17. 小刀やナイフを研いだことがありますか 18. アイロンをかけたことがありますか 19. 小刀やナイフで鉛筆を削ったことがありますか 20. りんごの皮をむいたことがありますか 21. マキを使って火をたき料理をしたことがありますか 22. 製材所や木工所で木を加工しているところをみたことがありますか

注) 設問：あなたのこれまでの体験について，次の項目について，その度合いを番号で回答してください。なお，中学生以上の方は，小学校までの経験でお答え下さい。

4：よくある 3：ときどきある 2：何度かある 1：一度もない

3. 結果および考察

3.1 生活体験調査

a. 年齢・性別

調査結果を年齢層毎に分類したものを表2に示す。本表には、第1位と5位の差を示すとともに、検定を行った結果を示した。また、年齢層毎に分析した結果を表3～6に示す。これらの表には、男女による差を示すとともに、検定を行った結果を示した。表2より、項目によって若干の差異はあるが、年齢が高まるにつれて生活体験の度合いが高く、現在の児童・生徒が最も生活体験が低い傾向を示した。技術体験(1.22)、人間関係(1.07)、野外活動(0.57)については有意差、自然体験(0.35)については有意傾向がみられた。

これらの結果は、児童期の遊びの内容の変化、生活用品の商品化、ものづくり離れなどが影響していると推察される。同様に、核家族化、少子化などの社会的現象が、児童期の生活体験不足に関係している可能性がある。これらの詳細については、今後検討していきたい。

表3は、最も経験の少なかった児童・生徒(6～15歳)を男女別に比較したものである。自然体験については、男女差はみられなかったが、人間関係、技術体験については女性が有意に高かった。これらについては、男女による遊びの種類の違い、家庭での生活体験の違いなどが関係している可能性がある。表7に示した「自由に活動できる時間の使い方」の調査結果からは、1位は何れも「テレビ、ゲーム、インターネット」であったが、それに費やす時間(長さ)については、調査していない。男性は女性に比べ、ゲームに費やす時間が長く、その遊びの多くを占めている可能性が高いため、生活体験の不足につながっているのではないかと推測される。

表4～5に示した16～35歳については、人間関係と技術体験は若干女性が高く、自然体験と野外活動は若干男性が高い傾向が示された。なお、46歳以上は9人とデータ数が少ないため割愛した。

表2 生活体験に関わる得点

調査項目	調査対象(年齢)					1位と5位の差
	6～15	16～25	26～35	36～45	46～	
人間関係	2.04⑤	2.09④	2.88③	3.11①	2.89②	1.07**
自然体験	2.13⑤	2.41④	2.48①	2.44②	2.42③	0.35+
野外活動	1.96⑤	2.19④	2.33②	2.33②	2.53①	0.57*
技術体験	1.62⑤	2.09④	2.45③	2.70②	2.84①	1.22**

注) ○内の数値は、年齢毎の順位を示す。

+ P<.10 * p<.05 ** p<.01

表3 生活体験に関わる得点(6～15歳・性別)

調査項目	調査対象			
	男性(37人)	女性(55人)	平均(92人)	男女差
人間関係	1.88	2.14	2.04	- 0.26+
自然体験	2.13	2.13	2.13	± 0.00
野外活動	1.92	1.98	1.96	- 0.06
技術体験	1.47	1.72	1.62	- 0.25+

+ P<.10 * p<.05 ** p<.01

表4 生活体験に関わる得点（16～25歳・性別）

調査項目	調査対象			
	男性（10人）	女性（9人）	平均（19人）	男女差
人間関係	2.00	2.11	2.09	- 0.11
自然体験	2.60	2.16	2.41	+ 0.44*
野外活動	2.38	1.82	2.19	+ 0.56*
技術体験	1.98	2.18	2.09	- 0.20 ⁺

+ P<.10 * p<.05 ** p<.01

表5 生活体験に関わる得点（26～35歳・性別）

調査項目	調査対象			
	男性（7人）	女性（27人）	平均（34人）	男女差
人間関係	2.62	2.96	2.88	- 0.34 ⁺
自然体験	2.80	2.39	2.48	+ 0.41*
野外活動	2.83	2.20	2.33	+ 0.63*
技術体験	2.43	2.46	2.45	- 0.03

+ P<.10 * p<.05 ** p<.01

表6 生活体験に関わる得点（36～45歳・性別）

調査項目	調査対象			
	男性（12人）	女性（56人）	平均（68人）	男女差
人間関係	2.39	3.26	3.11	- 0.87**
自然体験	2.52	2.44	2.44	+ 0.08
野外活動	2.42	2.33	2.33	+ 0.09
技術体験	2.29	2.70	2.70	- 0.41*

+ P<.10 * p<.05 ** p<.01

表7 自由に活動できる時間の使い方（6～15歳・性別）

（人）

調査項目	男性（37人）	女性（55人）	合計（92人）
1. 休養や家族とのだんらん	12(32.4%)③	15(27.3%)⑤	27(29.3%)⑤
2. 仕事や家事	0(0.0%)	3(5.5%)	3(3.3%)
3. テレビ・ゲーム・インターネット	27(73.0%)①	40(72.7%)①	67(72.8%)①
4. 学習活動	11(29.7%)④	17(30.9%)③	28(30.4%)④
5. 音楽鑑賞・読書（新聞・雑誌）	6(16.2%)	25(45.5%)②	31(33.7%)③
6. 見物（美術館・博物館・映画館）	3(8.1%)	7(12.7%)	10(10.9%)
7. 旅行・ドライブ	6(16.2%)	10(18.2%)	16(17.4%)
8. 飲食・ショッピング	0(0.0%)	10(18.2%)	10(10.9%)
9. 友人などとの交際	11(29.7%)④	16(29.1%)④	27(29.3%)⑤
10. 園芸・庭いじり	1(2.7%)	2(3.6%)	3(3.3%)
11. 軽い運動やスポーツ活動	20(54.1%)②	14(25.5%)	34(37.0%)②
12. ボランティアなどの社会的活動	1(2.7%)	0(0.0%)	1(1.1%)
13. ものづくり活動	10(27.0%)	12(21.8%)	22(23.9%)
14. 通院	1(2.7%)	2(3.6%)	3(3.3%)
15. その他	2(5.4%)	1(1.8%)	3(3.3%)

注) 回答は複数回答であり，（ ）および○内の数値は割合と順位を示す。

b. 生活居住地・性別

調査対象者を男女に分けるとともに6～25歳および26歳以上に分類し、児童期までの居住地域毎に分析した結果を表8～11に示す。表10、11より、26歳以上の対象者は、農山漁村、地方の市街地、都市部の順に高く、農山漁村の居住者が生活体験が豊富なことが分かる。女性においては、居住地域による生活体験の差が顕著にみられたが、男性においては、都市部と地方の市街地との差は少ないという傾向を示した。一方、表8、9の6歳～25歳の年齢層においては、男女とも自然体験は農山漁村が多いが、他の項目については、地域による差が少なくなっている。特に、都市部と地方の市街地との差がみられない。何れの調査でも、農山漁村の値が高いことから、児童期の生活体験は、自然環境の豊かさと関係するといえる。

表8 生活体験に関わる得点(6～25歳・居住地別・男性)

調査項目	調査対象			
	都市部(10人)	地方の市街地(16人)	農山漁村(21人)	平均(47人)
人間関係	1.85③	1.87②	1.97①	1.91
自然体験	2.14②	1.97③	2.47①	2.24
野外活動	1.92③	1.93②	2.15①	2.03
技術体験	1.63②	1.46③	1.66①	1.59

注) ○内の数値は、順位を示す。

表9 生活体験に関わる得点(6～25歳・居住地別・女性)

調査項目	調査対象			
	都市部(28人)	地方の市街地(20人)	農山漁村(17人)	平均(65人)
人間関係	2.16②	2.05③	2.22①	2.15
自然体験	2.06③	2.11②	2.36①	2.15
野外活動	1.92③	2.01②	2.05①	1.98
技術体験	1.73③	1.88①	1.86②	1.80

注) ○内の数値は、順位を示す。

表10 生活体験に関わる得点(26歳以上・居住地別・男性)

調査項目	調査対象			
	都市部(6人)	地方の市街地(6人)	農山漁村(11人)	平均(23人)
人間関係	2.31③	2.47②	2.56①	2.47
自然体験	2.33③	2.37②	2.78①	2.56
野外活動	2.20②	2.20②	2.80①	2.49
技術体験	2.23③	2.30②	2.53①	2.39

注) ○内の数値は、順位を示す。

表11 生活体験に関わる得点(26歳以上・居住地別・女性)

調査項目	調査対象			
	都市部(25人)	地方の市街地(31人)	農山漁村(32人)	平均(88人)
人間関係	2.84③	2.97②	3.43①	3.17
自然体験	2.03③	2.43②	2.71①	2.43
野外活動	1.91③	2.24②	2.54①	2.31
技術体験	2.47③	2.57②	2.79①	2.71

注) ○内の数値は、順位を示す。

3.2 木材利用拡大に関連する項目

a. 男女間の比較

木製品や木造住宅を積極的に購入するかなど、木材利用拡大に関連する質問の結果を表12のQ1～Q4に示す。具体的な質問内容は、Q1：自分用の机やイスを購入するとき、どのような材料の製品を購入するか、Q2：家を購入するとき、どのような材料の家を購入するか、Q3：気に入った木製品があったとき、高くても購入するか、高ければ購入しないか、Q4：友達と比べて木製品を使っている方かについて調査している。

本表より、全ての対象者を、男女により比較した結果、顕著な差はみられなかった。傾向としては、「木製の机やイスの購入」については女性が若干高く、他の項目については男性が若干高い値を示した。

表12 木材需要拡大に関連する調査結果（男女間の比較） (%)

質問項目および選択肢	調査対象（性別）		
	男性	女性	合計
Q1.自分用の机やイスを購入するとき、			
①木でできた製品を購入したい	66.7	69.7	68.8
②金属やプラスチックでできた製品を購入したい	1.4	5.9	4.5
③どちらでもよい	31.9	24.3	26.7
Q2.家を購入するとしたら、			
①木がたくさん使われている家を購入したい	66.7	64.5	65.2
②鉄筋やコンクリートでつくられた家を購入したい	14.5	9.9	11.3
③どちらでもよい	18.8	25.7	23.5
Q3.気に入った木製品があったとき、			
①高くても購入したい	35.3	33.1	33.8
②高ければ購入しない	64.7	66.9	66.2
Q4.友達と比べて木製品を使っている方ですか			
①そう思う	38.0	23.2	27.9
②あまりかわらない	43.7	58.3	53.6
③使っていない方である	18.3	18.5	18.5

b. 性別・年齢層別の比較

同様の調査を性別で分類し、年齢層毎に分析した結果を表13、14に示す。なお、表中の数値は回答割合を示している。表13より、男性は、36歳以上の年齢層において購買意欲が高い。実際に木製品を使用しているかについては、6～15歳の年齢層が最も低く、26～35歳が高い値を示した。女性は、26歳以上の年齢層において購買意欲が高い。実際に木製品を使用しているかについては、46歳以上は高いが、全体的に低い値を示した。これらの要因については、分析の余地がある。

3.3 木材利用意識と生活体験

先述の質問項目Q1、Q2、Q3で「木製品や木造住宅を積極的に購入」「高くても購入する」と回答した「意識が高い者」が50人（22.4%）であった。さらに、その中で実際他の者に比べ自分は木製品を使っている方であると答えた者（「意識が高く実践」）は、20人（9.0%）であった。一方、木製品に対する購入意欲が低い者（「意識が低い」）は、34人（15.2%）であった。

表 13 木材需要拡大に関連する調査結果（男性・各年齢層の比較）（％）

質問項目および選択肢	調査対象（年齢層別）				
	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
Q1.自分用の机やイスを購入するとき、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①木でできた製品を購入したい	66.7	62.5	57.1	75.0	75.0
②金属やプラスチックでできた製品を購入したい	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0
③どちらでもよい	30.0	37.5	42.9	25.0	25.0
Q2.家を購入するとしたら、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①木がたくさん使われている家を購入したい	51.5	64.5	57.1	91.7	100
②鉄筋やコンクリートでつくられた家を購入したい	24.2	9.9	0.0	8.3	0.0
③どちらでもよい	24.2	25.7	42.9	0.0	0.0
Q3.気に入った木製品があったとき、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①高くても購入したい	37.5	33.1	28.6	33.3	50.0
②高ければ購入しない	62.5	66.9	71.4	66.7	50.0
Q4.友達と比べて木製品を使っている方ですか	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①そう思う	25.7	43.8	85.7	41.7	50.0
②あまりかわらない	60.0	25.0	14.3	41.7	25.0
③使っていない方である	14.3	31.3	0.0	16.7	25.0

表 14 木材需要拡大に関連する調査結果（女性・各年齢層の比較）（％）

質問項目および選択肢	調査対象（年齢層別）				
	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
Q1.自分用の机やイスを購入するとき、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①木でできた製品を購入したい	51.9	30.0	77.8	87.5	100
②金属やプラスチックでできた製品を購入したい	11.1	20.0	0.0	1.8	0.0
③どちらでもよい	37.0	50.0	22.2	10.7	0.0
Q2.家を購入するとしたら、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①木がたくさん使われている家を購入したい	44.4	60.0	66.7	80.4	100
②鉄筋やコンクリートでつくられた家を購入したい	18.5	10.0	7.4	3.6	0.0
③どちらでもよい	37.0	30.0	25.9	16.1	0.0
Q3.気に入った木製品があったとき、	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①高くても購入したい	16.7	20.0	37.0	43.6	100
②高ければ購入しない	83.3	80.0	63.0	56.4	0.0
Q4.友達と比べて木製品を使っている方ですか	6-15	16-25	26-35	36-45	46-
①そう思う	20.8	9.1	22.2	25.5	60.0
②あまりかわらない	64.2	63.6	55.6	56.4	20.0
③使っていない方である	15.1	27.3	22.2	18.2	20.0

これらの対象者について、児童期の生活体験について分析したところ、表 15 に示す結果となった。全ての項目について、木製品購入の意識が低い者が最も低い値を示した。一方、意識が高い者は、全体の平均値よりも全ての項目において高い値を示した。さらに、実際に他の者と比較し木製品を使用する頻度が多いとする者が、全ての項目において高い値を示した。

これらのことから、木材利用意識と児童期の生活体験の度合いについては、何らかの関係があるものといえる。木製品や木造住宅を積極的に購入する意識が高い 50 人について、

詳細に分析した結果を表 15 に示す。性別では、男性：16 人（20.5%），女性 34 人（22.1%）で、性別による差異はみられなかった。年齢については、6～15 歳：9 人，16～25 歳：5 人，26～35 歳：8 人，36～45 歳：11 人，46 歳以上：7 人であった。それぞれの年齢層に占める割合は、9.8%，25.0%，23.5%，16.2%，77.8%と、差異がみられたがその要因については、分析していない。

児童期の居住地は、都市部：16 人（全体の 23.2%），地方の市街地：17 人（23.3%），農山漁村：17 人（21.0%）であり、居住地による差異はみられなかった。最終学歴については、戦後の高校：7 人（全体の 21.9%），戦後の大学・短大・高専・専門学校：32 人（34.0%）と、若干差異がみられた。

木材利用の意識等について調査した結果を、調査対象者全体の平均値と木材利用に高い意識を示した 50 人の平均値を比較したものを、表 16 に示す。本表より、全ての項目について木材利用への意識が高い者が高得点を示し、特に「木材を利用することは森林づくりにつながる」においては、顕著な差がみられた。このことから、積極的に木材を利用しようとする者は、その行為が森林づくりにつながるという意識は、一般の対象者よりは、高い意識を持っているといえる。また、実際に他の人に比べ、木製品を使用しているという意識もみられた。しかし、木材を使ったものづくりに取り組んでみたいという意識においては、差異はみられなかった。同様に、最近の 1 年間にもものづくり体験教室に参加した回数を示す値においても、全体平均が 2.51 回／年に対して、木材利用に意識の高い者は 2.48 回／年と差異はみられなかった。このことから、これまで実施されてきたものづくり体験教室は、参加者の木材や森林に対する意識を変える効果は、得られていないといえる。

表 15 木材利用意識と生活体験との関係

	意識が高く実践	意識が高い	全体平均	意識が低い
人間関係	2.90	2.79	2.56	2.31
自然体験	2.59	2.48	2.34	2.17
野外活動	2.56	2.31	2.19	1.96
技術体験	2.71	2.50	2.21	1.99
該当者数	20人(9.0%)	50人(22.4%)	223人	34人(15.2%)

注) () 内の数値は割合を示す。

表 16 木材利用についての意識

調査項目	全体の平均	意識が高い者
1. 木を植えて育て、切って利用し、また木を植えることをくりかえすことは良いことですか。①良い ②なんとなく良い③あまり良くない ④良くない	3.40	3.46
2. 木材を利用することは、森林づくりにつながると思いますか。 ①そう思う ②少し思う ③あまり思わない ④まったく思わない	3.23	3.38
3. あなたは友達と比べて木材でできた製品を使っている方だと思いますか。 ①使っている方である ②あまりかわらない ③使っていない方である	2.10	2.20
4. 木材を使ったものづくりにもっと取り組んでみたいと思いますか。 ①取り組みたい ②少し取り組みたい ③あまり取り組みたくない ④取り組みたくない	3.47	3.48

3.4 森林と生活との関係についての意識

調査対象者に、森林の働きとして重要だと思うものを、3 つまで選択させ得点化したものを表 17 に示す。年齢層により若干の違いはあるが、全対象年齢の平均得点が高い方か

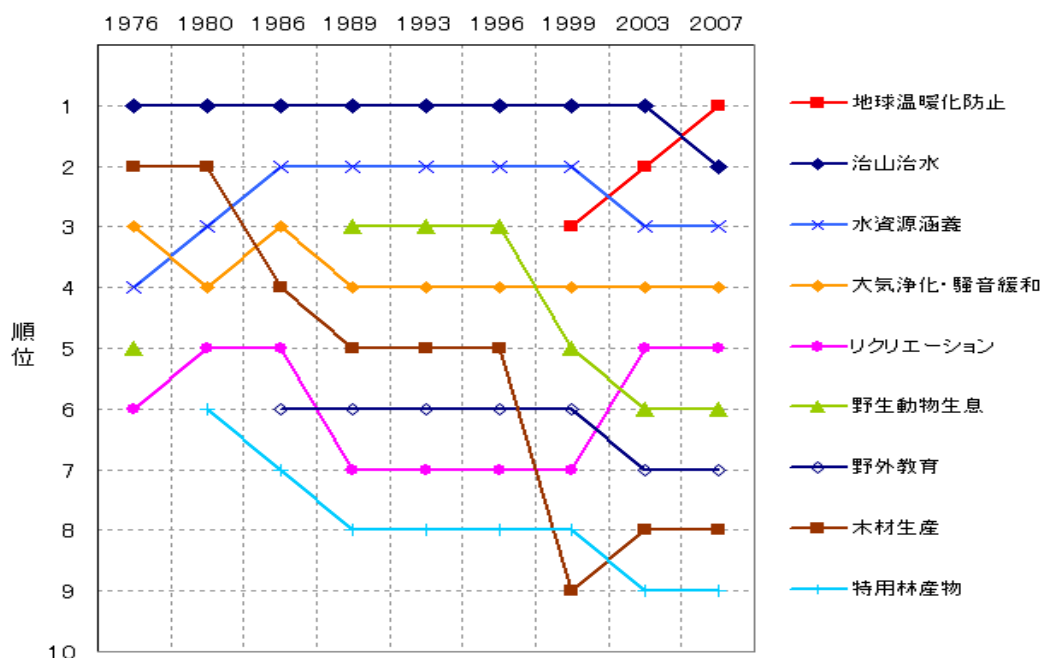
ら、①水資源の涵養、②地球温暖化防止、③治山治水、④川や海的环境保全、⑤野生動物生息、⑥空気の浄化、⑦リラックス効果、⑧木材生産、⑨食べ物の生産であった。一方、内閣府が4年毎に実施している世論調査(2007)を図1に示す⁵⁾。本図より高得点順に、①地球温暖化防止、②治山治水、③水資源涵養、④大気浄化・騒音防止、⑤レクリエーション、⑥野生動物生息、⑦野外教育、⑧木材生産、⑨特用林産物であった。

表 17 森林と生活との関係についての意識 (回答者割合) (%)

調査項目	調査対象(年齢)				
	6~15	16~25	26~35	36~45	平均
1. ぐらしに大切な地下水をためる	50.0②	75.0①	61.8①	73.5①	65.1①
2. 川や海の生き物が生息しやすい環境	38.0④	35.0③	32.4④	33.8④	34.8④
3. 山くずれや洪水などの災害をふせぐ	32.6⑤	40.0②	55.9②	51.5③	45.0③
4. 地球温暖化をふせぐ	54.3①	35.0③	47.1③	61.8②	49.6②
5. 人をリラックスさせる効果がある	17.4	30.0	20.6	25.0⑤	23.3⑦
6. いろいろな生き物のすみかになる	27.2	35.0③	26.5	20.6	27.3⑤
7. 住宅や木製品をつくる木材がとれる	12.0	15.0	11.8	11.8	12.7⑧
8. シイタケ等の食べ物を与えてくれる	4.3	0.0	2.9	1.5	2.2⑨
9. 空気の浄化、うるさい音の減少	42.4③	5.0	32.4④	19.1	24.7⑥

注) 設問: 森林の働きとして重要だと思うものを、3つまで選択しなさい。

○内の数値は、年齢毎の順位を示す。



(注) 3つまでの複数回答結果(1976年のみすべての複数回答)。1976年は風雪害防止が7位、また騒音防止が別項目で8位。

(資料)内閣府世論調査

図 1 森林に対する国民の期待

森林の機能として、近年注目されているのが地球温暖化防止機能であり、1999年に3位、2003年には2位、そして2007年には1位となっている。これは、1997年に気候変動枠組み条約にもとづく第3回締約国会議（COP3）で「京都議定書」が採択された影響が大きいといえる。他方、1976年～80年には第2位であった木材生産機能は、外材輸入の増加、木材価格の低落と平行して順位を下げ続け、1999年には、最下位の9位となった。もっとも、2003年には8位とやや戻した。これは、間伐が増え、熱帯雨林の破壊などに関心が集まり、また戦後直後に植林した森林の伐期が訪れることから各地で木材のブランド化、国産材使用の促進が図られつつある状況を反映していると言われている。それに対応するように、林野庁を始めとする行政も森林を素材生産の場から、環境保全の役割を強調する方針に転換している。

一方、熊本県においては、上水道や生活用水の多くが地下水でまかなわれており、行政機関のPRもあり、表17に示すように、どの年齢層でも水源涵養が上位を占めている。続いて、治山治水機能、地球温暖化防止機能が上げられている。このように、全国的な傾向と熊本県の傾向の違いは、森林と日常生活との関わりや、メディアの情報も含めた生活経験の違いによる影響があると推察できる。このような事例からも、生活経験と森林や木材についての意識には関係性があるといえる。

4. おわりに

児童期の生活体験について、性別や年齢層、生活圏による比較を行うとともに、これらの経験と木材利用に対する意識の違いについて分析を行った。児童期における生活体験については、男女間に大きな差がみられるとともに、児童期の居住地域によっても、差異がみられた。この傾向は、若い世代よりも年齢の高い世代に顕著にみられた。

木材利用の意識の高い者とそうでない者を比較すると、児童期の生活体験の度合いに差がみられ、生活体験の多い者が、木材を積極的に利用する意識が強いことが分かった。

しかしながら、木材を積極的に利用していこうという意識と、従来のものづくり体験は、直接的な関わりは薄いことが明らかとなった。今後、木材を積極的に利用しようとする意識に対して、どのような要因が影響しているかについての調査研究が望まれる。

参考文献

- 1) 文部科学省：文部科学省における「持続可能な開発のための教育の10年」に向けた取り組み、http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/jizoku/kyouiku.htm.
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 技術・家庭編，教育図書，2009
- 3) 片岡徳雄：子どもの感性を育む，NHK ブックス 603，NHK，1990
- 4) 深谷昌志・深谷和子：第34回日本教育社会学会資料，1982.
- 5) 社会実情データ図録：<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/0690.html>